

【巻頭言】

大学院生の教育訓練について

比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター

センター長 塩山二郎

平成17年度の年報をお届けいたします。

当大学院もやっと軌道に乗り、院生の実習の場として心理相談センターが機能し始めました。一人の臨床家を育てるということは、なかなか大変なことで、地道な努力と忍耐が必要であるということを教えられます。

特に、実習に関しては、総合病院と単科の精神病院に行っていますが、その病院の全体の雰囲気を知り、その中で、何を要求され、それにどのように応えるかといった流れを把握することが大切だといえます。ただ、期間が短く、一部を理解する程度では、院生にとっては十分な実習にならないと思います。

私は、総合病院の中で、看護師さんの実習を長年見てきましたが、それは時間的にも、内容的にも充実したものでした。これは、この領域の歴史と経験から生まれたもので、われわれとしては、見習うことの多い実習と考えられます。

心理臨床の実習で大切なことは、第一に、病院がどのような構造になっていて、どんな役割を果たしているかということでしょう。それは、一患者さんが病院を訪れた時に、どのような処遇を受けるか、そして、そのことが患者さんにとって満足のいくものであるかどうかといった視点から考えられなければならないでしょう。

つまり、一患者さんにとって、精神的に安心できる対応がなされているかどうかを考えることです。時として、心理臨床家への批判の中に、部屋にこもって他領域とのかかわりを避けるといった動きを指摘されることがありました。対人関係理解を生業とする者としては、決してそうであってはならないと考えます。他領域の人たちとの連携がうまくやれずして真の臨床家とはいえません。ここらの感覚を身につけるためにも、病院実習はなくてはならないものといえます。

まだ、実現していませんが、精神科、神経内科、小児科、ペインクリニック、整形外科あたりの実際の診察に立ち会うことができ、シュライバーとしての実習ができれば、さまざまな治療者－患者関係を理解することができるのではないかと思います、いずれ実現したいと考えています。

他領域の人との協力関係を築くには、広い視野と自発性が要求されるものですが、そのような人材をわれわれとしてどのように養成していくか、抱えている課題もたくさんあります。

センター職員も、目標に向かって努力してまいりますので、大学内外の方々のこれからのご協力をよろしくお願い申し上げます。